

会議名	日本畜産学会第107回大会
開催日時	2007年3月27日～29日
開催場所	麻布大学
主催者	日本畜産学会
参加人数	会期中に優秀発表賞応募演題、一般演題、シンポジウム、WAAP会長特別講演などが行なわれ、参加者は多数であった。
1. 会議の概要	<p>優秀発表賞応募演題</p> <p>本講演の目的は若手研究者の研究成果を顕彰し、将来の発展を期待するもので、哺乳動物繁殖分野に関しては、「乳牛の分娩後の疾病と繁殖成績低下との関係」、「乳牛における死産の要因の検討」、「ブタ精子のキャパシテーションにおけるcAMP-Epac-カルシウムシグナリングの役割」、「卵丘細胞におけるADAM17の発現とそのERK1/2系の活性化を介した卵丘細胞の膨潤に果たす役割」、「マウス卵成熟過程におけるmTORおよび4E-BP1の発現と役割」、「Xenopus卵子抽出液によるマウス卵子繊維芽細胞の脱分化と遺伝子発現解析」などの発表が行なわれた。講演受賞者については、今後の研究者としての活躍と研究の発展が期待される。</p> <p>一般講演の発表については、次の2.で記述する。</p>
2. 今後の研究 開発分野として重要と思われる関連発表	<p>一般講演</p> <p>産業生産動物の繁殖に関するテーマは幅広い分野での取り組みが行なわれ、研究課題へのアプローチの動機、手法、成果は千差万別であった。</p> <p>基礎分野では最新の研究手法を駆使して未解明の部分の解明したもの、応用分野では研究材料として得難い産業生産動物そのものを対象とし、積極果敢に解明を試みた課題も数多く見受けられた。</p> <p>課題のなかには、フローサイトメーターによるウシ選別精子による雌雄の産み分けに関する実証試験など、将来に期待の持てる現在進行形の演題も見られ、これらについては研究の発展が期待される。</p> <p>また、わが国が国際社会の中で最も多くの事例を有し、先導的な役割を果たさなければならない分野（例えば体細胞クローン牛について）の報告も見られたが、これらについては、多くの制約があり、様々な困難が伴うことと思うが、将来の発展のためにも、得難い材料を有効に使い、他の諸国では解明できない研究情報を提供すべきであると考えられた。</p> <p>臨床現場の直接的課題としては、研究成果を個体レベルで解明、応用できる成果が期待される。</p> <p>一般講演としては以下のようなものが報告された。</p> <p>「卵胞発達過程におけるEGF like factorの発現制御機構とその顆粒層細胞の機能性変化に対する役割」、「卵丘膨化時のヒアルロン酸-CD44相互作用がブタCOCギャップジャンクション機能におよぼす影響」、「phosphodiesteraseを抑制したブタ卵丘細胞卵子複合体におけるgap junctionおよびLH受容体発現の動態」、「ウシ卵母細胞の体外発育に及ぼすデキサメタゾンの影響」、「体外成熟培養におけるICR系マウス卵母細胞の細胞成熟に及ぼすヒ</p>

	<p>ポキサンチンの効果」、「第1卵割細胞数によって分類された体外生産ブタ胚の発生能と染色体異常の出現率」、「in vitro development of monospermic and polyspermic porcine embryos」、「卵子の媒精時間が作出されたウシ胚の性比に及ぼす影響」、「ウシ胚伸張培養系における培養液の検討」、「遠心および電気融合処理により作出したブタ第二減数分裂中期核置換卵の体外受精後の発育能」、「ブタ卵巢皮質組織片超低温保存法の開発」、「長期保存した凍結乾燥ラット精子に由来する産仔の作出：保存温度の影響」、「琉球在来豚アグー精子の凍結保存：凍結保存希釈液への安定型アスコルビン酸誘導体の添加が融解後の精子性状に及ぼす影響」、「フローサイトメーターによるX,Y選別精子の活力低下防止の検討」、「フローサイトメーターによるウシ選別精液の人工授精成績に及ぼす選別時間および産歴の影響について」、「わが国で生産された体細胞クローン牛の転帰」、「体細胞クローン牛後代の初産後の泌乳性と繁殖性」、「体細胞クローンおよび後代雌ブタの繁殖能力」、「ウシグレリンによるウシ下垂体前葉細胞からのGH分泌特性」、「FSHβ遺伝子の新規転写因子Lhx2は同族のLhx3と作用機序を異にする」、「CIDRとEBを用いた黒毛和種経産牛の過剰排卵処置が胚回収成績に及ぼす影響」、「臍内留置型黄体ホルモン製剤が受胎に及ぼす影響」、「親子放牧条件下におけるCIDR cynch処置による分娩後早期の繁殖機能回復」、「乳汁中Progesterone濃度測定と発情・排卵同期化の応用による乳牛群の繁殖プログラムの有用性」、「ウシ黄体におけるapoptosisにおよぼすglucocorticoidの影響」、「ウシ黄体細胞のapoptosis抑制因子としてのprostaglandinsの役割」、「Blood concentration of O₂ and NO during PGF₂-induced luteolysis in cows」、「長期不受胎におけるオキシトシン負荷後のプロスタグランジンF₂α分泌能」、「乳牛における胚移植の受胎に及ぼす要因の検討」、「黒毛和種繁殖雌牛の過肥防止目的として哺乳が分娩後の栄養代謝状態と繁殖性に及ぼす影響」、「ウシ胎盤からの細胞外マトリックス成分の抽出と生物活性」などである。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>会期の第1日目の午後、大学百周年記念ホールでWAAP会長のProf. Assefaw Tewold氏の特別講演が45分にわたって行なわれた。講演演題は“The Challenges of Animal Production in the World: Looking ahead”であり、同会長は“Interamerican Institute for Cooperation in Agriculture”の教授で、日頃われわれの聞くことの出来ない内容のAnimal Productionの講演であった。内容はAnimal Productionが世界各国、各地域で、GNP(国民総生産)にどのくらい貢献しているかなどを具体的数字で示され、先進各国の中でも最も低い自給率に悩むわが国の畜産にとっては反省や示唆に富む内容が多々含まれているように思われた。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>演題には、基礎分野で実験動物を用いて、最新の研究手法により未解明の部分を知明したもの、応用分野では研究材料として得難い産業生産動物そのものを対象とし、積極果敢に解明を試みた課題も数多く見受けられたが、応用分野の課題の中には、成果が中途半端で、取り組みに当たって、事前の綿密な実験計画の必要性が感じられる課題もあった。また、臨床現場での直接的課題として、既報の単なるトレースでなく、新しい視点による、生体の個体のレベルでの現象、機構の解明に繋がる課題が切望される。</p>

5. 会議の所感	<p>日本畜産学会第 107 回大会は麻布大学で行なわれ、内容的には大変充実した大会であった。会場の麻布大学は校舎・施設も立派で、各研究施設を直接見学することは出来なかったが、最新の実験設備が調えられているものと思われ、将来の研究実践基地としての期待を持てた。とくに、今回大会の目玉として行なわれた、他学会との共催でのシンポジウムや特別講演、畜産学会賞の受賞講演などは、一般講演とともに、研究の将来に向けての動向を実感させるもので、有益であった。</p>
報告者	森 純一